

『青山評論』
記者 三浦泰一郎 論

——北村透谷との接点を辿って——

辻 本 雄 一

I

戦雲急を告げる昭和十九年五月、キリスト教伝道生活に五十年を捧げてきたひとりの牧師が、ささやかな説教集を編んだ。題して、「恩寵の流」——限定五〇〇部である。

五十題の説教のうち、「我等は戦ふ」「血を流すことなくば」「殉国への遭進」「八紘一字の精神」等というタイトルから、当時の世相が如実に窺われ、知らず知らずのうちに戦雲の中に巻き込まれてゆくひとりの牧師の姿を、私達は、垣間見ることが出来る。

しかし、この牧師を簡単に否定して突き放してしまえぬ何物かを、私が感じるのは、彼がこの説教集に付録として付け加えたひとつの〈青春の譜〉によつてである。

この牧師——三浦泰一郎（みうら・たいいちろう）が、わが国

の近代文学史の中に何らかの係わりを持ったとすれば、それは北村透谷との関係をおいて他にないであろう。三浦が「若き頃の思ひ出」と呼んだ文章は、まさに透谷と深く係わっていた。

三浦が「恩寵の流」の巻末に付した二文とは、

○永遠の生命に（大正十五年九月 教界時報）

○事業原論（明治廿六年六月 青山評論社説）

である。前者は「娘を失ひし日の思ひ出」と副題が付され、後者には「愛山と透谷との論議の折に」と付された。勿論初めて発表された時には無かつたものである。

一方、透谷にも「三浦泰一郎君」の一文（評論発表時に）がある。岩波版全集では、二卷二九一頁に収められてある。

透谷は、自分が担当していた『評論』文芸欄執筆の後任として、当時『青山評論』の記者であった三浦を推したのである。

三浦にとっては、『青山評論』編輯に携わった時期が、当代の

文学に係わったおそらく唯一の時期であった。明治二十六年の約一年間にあたる。

もうひとつ、これは従来まったく気付かれなかったことであるが、三浦は透谷追悼の文章を『青山評論』に寄せている。十分すぎるほど網羅している「近代文学研究叢書2」(昭和女)の「北村透谷資料年表」にも落ちており、『文学』(昭31・2)の「北村透谷特集」の文献目録(山田博光)にもみえない。

透谷と三浦泰一郎(号・流水)との接点を迎れば、三点が文献としてまず上げられる。この三点になるべく触れながら、三浦の評論活動にスポットをあててみようとするのが私の試みである。近しい同世代人としての三浦の可能性とその限界とは、また透谷を測る尺度ともなれば、と思う。

II

雑誌『青山評論』は前身を『須論』⁽¹⁾と言い、明治二十三年二月二十八日聖風社より創刊された。「本誌ハ普ク學術上ニ係ル論説ヲ掲載スルモノナレバ」とあるように、純学術雑誌として出発した。編輯は笠原民治郎があたった。

「須ラク論ズベシ」を目標として、池田菊苗、巖本善治、本多庸一、津田仙、山田寅之助、山鹿旗之進、木村駿吉、三好学、元良勇次郎、徳富猪一郎、竹越與三郎、小崎弘道、浅倉外茂鐵、平岩愼保、平田平三らが「特別寄書家」として名を列ねているが、実際に執筆の中心を成したのは、笠原民治郎、岡田哲蔵ら、東京英和学校(青山学院の前身)関係者たちであり、次第に学生間に

も浸透していった。

明治二十二年頃には文学や弁舌の進歩を図る目的で、第一文学会とよばれるものが生徒達によって組織され、毎回数回邦語及び英語の演習会が開催されていた。⁽²⁾同じような試みが当時明治学院、麻布の東洋英和学校でも催されており、三校連合の文学会が「同盟文学会」の呼び名で組織された。その第四回演習会が明治二十三年三月十五日青山に於て開かれている。内容は『須論』⁽³⁾二号に詳しい。

また、同盟文学会との関係ははっきりしないが、第一回文学会なるものも、明治二十四年四月二十五日開催され、邦語英語による語学文学の演習が行われ、次いで二十五年十一月四日神学部に於ても文学会が組織されるに至っている。⁽⁴⁾

女性啓蒙雑誌であった『女学雑誌』が、明治二十二、三年頃から積極的に文学に力を入れるようになった背景に、「読者自身の文学熱が次第に高まったこと、時代一般に文学への関心を強めてきたこと」⁽⁵⁾も一因としてあげられるのであってみれば、青山の地に文学への氣運が満ち溢れてきたとしても不思議ではない。

このような学生の間での文学に対する関心の増大は、やがて『須論』にも反映されてくるようになり、『青山評論』への改題に大きく作用したと考えられる。なかでもイチンチャップを執ったのは神学部の学生であり、その中から頭角を現わしてくるひとりとして、三浦泰一郎をあげることができる。

『須論』は二〇号まで発刊され、明治二十五年一月十六日発行の二一号から『青山評論』と改題された。発行所も青山評論社と

改称され、木田八十吉が編輯にあつた。改題の理由は「いさゝか改らたむるありて」とあるだけで判然としないが、この号から新たに小説雑誌評の欄が僅かではあるが登場してきているのは興味深い。

三浦はこの号におそらく文学会での発表草稿であらう「クラウドを読む」の一文を寄せている。処女作である。

「クラウドを読む」は、ユーゴ作の「クラウド」が明治二十三年一月二月にかけて森田思軒の訳で『国民之友』に連載され、さらに二十五年小冊子に纏められた時、それらを読んでの感想を述べたものである。二段組み五頁ばかりの評論に三浦は作品「クラウド」を離れて自己の考えを随所に吐露している。

三浦は開化政策の結果が富者と貧者との格差として現出したことを指摘し、開化政策と切つても切り離せぬ富国強兵殖産政策が上から押しつけの合理化政策であることを端的に見抜いたあと、次のように言う。

嗚呼生存競争、遂に止むべからざる乎。優勝劣敗、到底真理なる乎。よし真理なるにもせよ、一方に於ては正義の觀念、いよ／＼没了し、他方に於ては不平者の恨声、ます／＼高まる、其極処や知るべし。然れども此は世の所謂開化なるものゝ結果なり。

此の如くば、開化は名よき一種の野蛮のみ。野蛮は虐主、斂税を以て民を疲らす。而して開化は虐主に代ふるに富者を以てせしむるに過ぎず。

鹿野政直氏は「日本近代化の思想」(昭47、10刊)で、これまでの西欧化イコール近代化のイメージを告発し、土着的な「世直しの想念」に拠る「もうひとつの近代」の可能性を追究した。そのなかで氏は、文明開化の民衆生活への加害性を指摘し、「文明開化政策が、空前の規模と件数の農民騷擾でむかえられたのは、それにひめられたこの加害性のゆえにはかならなかつた。」(p.52)と言う。三浦の主張の根幹も、この文明開化の民衆への加害性を告発することにあつたのではないか。そこから抑圧された人々への関心は共感をともなつて彼の心を把えてゆく。

すでに二年前、透谷は明治二十二年から二十三年への推移の中に歴史の大きな転換を察知し、民衆への警告を含んで時勢の慨嘆を述べた。(同・4、時勢に感あり、泣かん乎笑はん乎) 明治二十五年三浦は民衆への共感を文明開化を正確に批判する視点から獲得している。しかし彼に文明開化の次に用意されているものが何であるのか、つまり透谷が慨嘆した「時勢」への目くばりが行き届いていたかどうかは疑問である。

三浦はさらに続けて社会主義への志向を次のように言う。

熱ら世界の傾向を考ふれば、開化の度高まる処貧富の懸隔甚たしく、富める者益富み、貧しき者愈貧しく、其平を得ざる処嗚て社会主義と化するを見る。我国も亦爾か進みつゝあるなり。是れ独り学者の材料たるのみならんや、實際問題となるの日遠きにあらざるべし。

確かに状況を先取りした鋭さは内包してしよう。が、文明開化批判から社会主義志向への過程のなかに、何かしら短絡したものの

が介在し次第に観念化されてゆく傾向は否めない気がする。

また、一方で次のようにも言う。

即ち森有礼を刺殺し、大隈重信を狙撃し、露国皇太子を負傷せしめた犯人達について、

然り愷かに渠等は手を下せり、然れども渠等は単に手を下せしのみ。更に因て来らしめしものあり、以て激さしめしものあり。手を下せしもの固より憎むへし、只此を発憤せしめし筆と舌と心とに比すれば孰れぞ。而して人は渠等を仇視し、其他は措て問はず。

と言ひ、

我国一派の壮士を荆軻たらしめしは社会の悪境界なりとせんか。之を痛泣せずして何をか痛泣する。(傍点引用者)

と結ぶ。

三浦は正確に事件の本質を見据えてもいる。

透谷が一年後「罪と罰」を論じた文章(明26・1「罪と罰」)でこの問題にわずかに触れているのは興味深い。

来島某(引用者註、大)、津田某(引用者註、露国)等のいかに隣れむべき最後を為したるやを知るものは「罪と罰」の殺人の

原因を浅薄なりと笑ひて斥くるやうの事なるべし、と言ひ「社会の底にある最暗黒」を衝いている。

彼らが「社会の悪境界」を言ひ、「社会の底にある最暗黒」を言うとき、おそらく彼らは自己を醒めたものとして意識しているであらう。そのことは必然的に彼らを孤独の崖に立たせる筈であるが、三浦の場合この孤独感の掘り下げというものは欠如してい

る。その点彼の状況への発言を大いに弱めているのは認めねばならないであらう。それは当代にひとつの個性として輝いた透谷と比べてみて言えることで、三浦にとっては無理からぬところであつたかも知れない。

「グラウドを読む」の文章などは、透谷のそれと比べても、また明治二十五年という思潮の中に置いてみても、内容、文章の格調といった点でも決して見劣りのしないものを持っていると思ふ。三浦の評論の基調を知るうえでも見逃すことができない。

「グラウドを読む」は最後に「文学」への係わりを次のように説いている。

然れども今の文学者、彼にあらざれば是、一は野蛮なりと罵れば他は猥褻なりと詰り、徒らに豆大の目を以て箱小の中に争ふ。文学国を亡はずと言ふもの豈に故なしとせんや。抑も文学へ情を以て立つ。痕なき傷に胸打ち、哀しむ者も哀む、此れを除きて他に何にか求むべき。時に輿論の枝折となり、或は百世の師表となる。文学者の天職、此くの如く至高至潔なり。(傍点引用者)

「豆大の目を以て箱小の中を争ふ」とは、かなり明確な形での当代文学批判である。当時文壇の大勢を占めていた才人・佳人说、いわゆる人情小説の卑俗な写実性を斥けることによつて、新しい「文学の理想主義」とでもいうべきものが待望されている。しかも「文学者の天職」として要請されている処に、キリスト者としての面目もある。

たしかに、〈文学上の理想主義〉というべきものが、「文学者の天職」に即直結する認識は、発想の根拠に文学の社会的役割を重視し、啓蒙的色彩を強めてゆく事実を覆うべくもない。しかし、それが一般にキリスト者の立場からの文学論に多かれ少なかれ反映されたものであつてみれば、三浦個人を批判するにはあたらな

い。
文学の極盛、極衰の両論が華やかなりし当時の文学状況の中で、こういつた主張のもつ意味は十分吟味されてよい。「文学者の天職」を突き詰めてゆく行程は、また一面で〈文学の自律〉を認識する道を拓いた筈でもあつたから……。

三浦の〈文学者〉への要請は、植村正久がかつて論じた〈文学者〉へのそれを想起させるものがある。

植村は「今の文学」(日本新論²)で「文学の要は、高大尊貴なる思想を、儼かに、且つ美はしく、発露して以て、人生に應用せしむるに在り」という立場に立つて、「大なる国民は大なる思想より成立す。高尚なる国民は、高尚なる真理に其養ひを受くるものなり。吾国人民の大思想大真理を待つこと久し恰も飢えた嬰兒の乳を探り求むるに異ならず。吾か文学者は何を以て之れに応ぜんとするか。」と言う。彼は今の文学を「蜉蝣的の文学」「短命の文学」として斥け、理想を掲げないでしだいに現実暴露主義に墮しかけている「写真的文学」(註¹「写実主義」)を排斥する。(論²「写実文学」¹「日本新論」)
当時西欧文学の理解の深さでは群を抜いていた植村の発言などは、無名の青年三浦などには多大の影響を与えていたのである。ともあれ彼らの〈文学者〉への要請は、文学作品をそれ自体か

ら次第に眼を文学者の内面へと向けさせていったことは確かであろう。そのことを彼らがいかに自覚的に把握したかどうかは、多少差し引いて考えねばならないとしても、透谷あたりには確固とした自覚がやはり蔽として把持されている。それはまた、作家的資質の問題、創作主体の問題を祖上にのせるための過程でもあつた。同時に、啓蒙的色彩が露呈し文学功用論を助長するための分岐点でもあつたと言えよう。

このように考えてくると、〈文学者の天職〉という発想は勿論キリスト教との関連を抜きにしては考えられぬが、作家の内面を抉出した効果は十分に評価されてよい。それは、創作主体の側から文学を考える、換言すれば〈文学の自律〉を認識するためのひとつのステップでもあつた、と言える。

透谷も「苦海塵境に清涼の氣を輪び入るゝにあらざれば、詩人は一の天職を帯びざる放蕩漢にして終る」(山嵐雜記²)と警告して「詩人の天職」を問題にするが、一方では「天賦の詩才ある人」とか「ジニアス」を問題にもして詩人の内面からの発想という通路をも留保している。

三浦も『青山評論』二四号に載せた「詩人ダビデ」あたりになると、詩人の内面としての「詩想」に着目して、「詩人とは此詩想を具へたるの人にして、信仰強く愛熱く而も望の確乎なるものを云ふ」と云い、「故に詩人の生涯は宛然此れ活ける詩にして、詩想の化身と謂つべし」と規定している。

このような詩人(≡文学者)の内面への着目、さらに内面からの発想という視点から〈文学の自律〉への志向を読み取つてもあ

ながちの外れとは言えないであらう。

「詩人ダビデ」はさらに続けて、

世へ冷たき学者のみの世にあらず、また熱き詩人の世なり

而して春へ花に由て多く立つが如く、人は靈に由て貴く、国は詩人に由て其元氣を保つなり。

と指摘し、「実に我國民は詩想を欠けり」と言う。このあとに透谷が「國民と思想」(『評論』^{明26・7})で言うところを続けてみても何ら不思議でないような気さえする。

透谷の言う「國民の元氣」と三浦が詩人に期待する「元氣」とは必ずしも同じものとは断定できないが、詩人の使命として國民や世の中と係わってゆくものの内容が、そこには託されている、と言えらるる。

しかしながら、ダビデ王を詩人と規定することはともかく三浦は次のような結語にたどり着いてしまう。あまりに早急にキリスト教の精神が鼓吹され、樂觀的な予測が当代への警告とはうららかに感じ取れる。

基督教は大なる詩想を養ひ、高き詩人を造る。余は実に此に明言す、我國人は尽くダビデの精神なくんば、或意味に於て詩人たらずんば、面も(面も)基督教の精神を味ふにあらずんば、断じて其人は衰へ我國は亡ばんと。

三浦の言う「詩想」が詩人の内面への着目という通路を開いていたにもかかわらず、キリスト教に倚りかかり過ぎて啓蒙的文学觀に近づいてゆくことは(文学の自律)への志向を摘み取ってしまふことになる。そういう点ではどこまでもへキリスト者三浦

であったという感じが強い。やがて彼が「事業」という問題と向かい合ねばならなかったのも決して文学の立場からではなく、キリスト者としての立場からであった。忠実なるメンヂストとしての立場からであった。それでいて三浦は文学への係わりを断ち切れずにいる。彼が『青山評論』の編輯に深く関与するにしたがって同誌は文学的色彩を濃厚にしてゆく。

すでに透谷と愛山との間に激しいやりとりが始まっており、三浦自身もそのことになみなみなぬ関心を示して発言もしていた。透谷は、その発言にある妥当性も見出し出していたのである。『評論』文芸欄の後任に彼を推薦することになる。

しかしまた、透谷はその推薦文で次のようにも言う。

透生近頃、時文批評に懶く、頗る読者の厚顧に背けるを以て遺憾とす、三浦君を推して読者に介する所以のもの、聊か平生の憾を解かんが為なり。

後任三浦の「莊重なる筆」に期待しつつも、透谷は自己の微妙な立場をやや持つて回った言い方で告白しなければならなかった。そのことが私には大きな意味をもって感じられるが、三浦の「事業原論」に触れるとき再考されることになる。

III

三浦が『青山評論』の編輯に携わるようになったのがいつであるのか、『青山評論』誌上からその確証を得るのは難しいが、三〇号(明25・11)前後であろうと推察できる。

三浦の文が初めて『青山評論欄』(注、巻頭評)に登場するのは三

一号(明25・12)の「大石良雄」で、第九回同盟文学会に於いて発表した草稿であるらしい。他にこの号では「録欄」の「明治廿五年諸界概評」のうち「宗教界」を担当し、神道仏教基督教の現況をも伝えている。

三浦の一般編輯者としての時期は四一号(明26・10・31)迄で、四二号(明26・11・30)からは編輯人として「青山評論」の実質上の編輯の全責任を負うことになる。前編輯人の木田八十吉が仙台浸礼派の学校に就任してゆくための編輯人交代であった。

その間、明治二十六年七月下旬先に述べたように「評論」にも入社して文界時評の筆を執り、同じころ山路愛山主筆のメソヂスト諸派の共通機関雑誌「護教」の編輯にも関与するようになっていた。

三浦はこの年の七月神学部を卒業したが、他の同級生が各地の教会に赴任していったのに比べて彼は「尚一年間在校する由」が報じられている。「青山評論」などの編輯手腕がかわれたのでもあろうか。

とにかく三浦の筆鋒がもっとも華やかな時期であったことは確かである。そんななかでおそらく三浦の代表的評論とでもいうべき「事業原論」が発表されたのであった。

「事業原論」は「青山評論」三七号(明26・6・20)の巻頭に発表されたものであるが、「恩寵の流」所収の折に「愛山と透谷との論議の折に」と副題が付されたように人生相渉論争に触発された面が強かった。

『青山評論』の同号「雑報欄」によると、三浦は五月二十日ガウ

チャ館の青年会大演説会で「民友社派と女学雑誌派」と題して演説している。その大要は、「今回両派の議少しく相容れざる所あるの旧来と所説を略叙し、世人が此人生の問題に對して寧ろ冷淡なるを慨し、次に両派を比較して其長短を論じ、実践と理想と、人物と自然と、動と静との如く相反するが如き觀あるも共に一を欠は完きこと能はず、相携提すべし、而して吾人は人生の問題をキリストより得ざるべからずと結論し」云々とある。

当時世間で冷淡にみられていた人生相渉論争について三浦はなみなみならぬ関心を抱いているのが分る。その論争の根本を「人生」の問題として把握し、お互いその長所を携提せよ、とまで言う。三浦が決して同じメソヂストの愛山に加担したわけではなかった。

三浦は三浦個人の問題として「事業」の問題を取り上げたかにみえる。透谷愛山の論争に絡めて「人生」の問題を、さらには「生命」の問題をも取り上げた。

確かに透谷愛山の論争はその呼称も人生相渉論争といわれるように、その行く手に「人生」の問題が大きく拡がっていようし、信仰との関わりもあって「生命」の問題までも問われるべきものであったかも知れぬが、透谷自身殊更にそれを回避したかにみえる。透谷にとつては「文学」を抜きにしての「人生」論、「生命」論はまさに空理空論であったのかもしれない。「内部生命論」が「文学」を足場にしての「生命」論であったことは象徴的であるが、周知のようにそれが中絶に終わった意味はあまりにも大きい。

三浦は同じ「青山評論」三七号「批評欄」でこの「内部生命論」

に着目し、数行を引用したあとで「文芸上に於ける生命の動機を論ずる所も面白し、文沈痛例へば青柳の雨に色上げたるが如し」と言っている。

「内部生命論」はいままでこそ透谷の代表作と目されるが、当時まったく何の反響をも呼ばなかった。ましてや『文学界』五号（明26・5・31）は巻頭に同じ透谷の「頑執妄排の弊」「人生の意義」「賤事業の辨」を大々的に掲げ、あとに編輯者の欄、緑色の広告を以て「内部生命論」が掲載され、其一、未完となっているだけになかなかひとの眼につきにくかった。三浦が諸論のなかでいち早くこの論に着目したのはやはり慧眼として評価できよう。ここには三浦の透谷への注目がどういふふうになされているかを知ろうと興味深いものがある。「文芸上に於ける生命の動機」をここに汲み取っているのも、メソヂストである三浦がただ単に愛山擁護にのり出してきたのではないことが分る。かと言って透谷弁護では勿論ありえなかった。

三浦は自身メソヂストとしての自覚にもとづきながら「事業」を論じたのであった。

「人の生命ある必らず為すことあり、為すことは実在の確証にして、事業は生命なり。」と言ひ、「事業は空を撃つものにあらず、人は目的なくして馳場を走るものにあらず、必ず戦ふものあるべし、必らず一定の目的あるべし、空の空の空を撃つべしと云ふも、遂に星にまで達することを期するに非ずや。」と暗に透谷への批判を含めながら「事業原論」を始める。

しかし、三浦の「事業」観の根本が「為すこと」という風に行

動主体、実践主体の側から発想され、それが「生命」に結びついてゆく点は注意してよい。愛山の「事業」観がとかく結果の側面、影響や成果の側面から眺められることが顕著であつてみれば尚更である。

透谷は「明治文学管見」ではっきりと「文学は人間と無限とを研究する一種の事業なり」と言っているほどで、ただ愛山の態度に「(1)世を益するの目的を以て(2)英雄の剣を揮ふが如くに(3)空の空を突かんとせずして、或的を見て(4)華文妙辞を退けて、而して人生に相渉らざるべからず」という点が露骨に表われているのを見て取ったとき、お互いの敵が「纖巧細弱なる文学」であることを十分承知しながらも、愛山の『史論』と名くる鉄槌（「人生に相渉る」を斥けねばならなかった）。

論争の発端にこのような微妙な絡まりがあつたことは当の愛山自身も自覚せぬことであつたし、次第に「事業」論争に転移してゆくなかで透谷は「賤事業辨」という弁解まで書かねばならなかつた。

「賤事業辨」では、「文学は「事業」といふ標準」で論ずべきではない、「文学上の価値」≠「事業」ではない、という点が明確にされて更めて愛山との距離を確認した感さえ抱かせる文章になっている。そこで透谷にとつて問われるべき問題は「文学」を論ずる標準はなにか、「文学上の価値」とは一体なんであるのか、ということになる。透谷にとつて「文学」の問題とは、まさに自己の拠つて立つべきもの、全存在を賭けるに値するものとしての有り

方が、一層際立ってくる。愛山が自己の信仰個条を強烈に自覚しつつ「必しも文学あるを要せず、唯此信認あるを要す。」(「信仰個條」(「文藝」26年中))と言いつつ切ったのと比べれば、われわれは透谷の「文章」事業」観に対する神経質なまでのこだわりを十分に掬いあげて必要はあろう。

三浦の「事業原論」も確かに「事業」だけを論じたものであったが、「事業は生命なり」という発想で「生命」観への通路を拓いていたことは、透谷への近接としても評価できる。

知らず益時勢論者、何を以て其事業を区別せんとする、蟻丘を標準とし、パベルの高塔の工夫をのみ事業を為せりと云ふか。

人へ到底其時勢にのみ限らるべきものにあらず、其事業とは単に其時勢にのみ適すべきにあらず、十年の後をのみ期すべきにあらず、百歳の後をのみ保すべきにあらず、千載の後をのみ待つべきにあらず、宜しく七千を七十倍し又七十倍し、高の高、奥の奥に突進す可きなり。

ここには三浦の民友社一派の世益主義への批判も窺われる。「時勢」にこだわらぬ「事業」は勿論精神的なものであって、「高の高、奥の奥」という言い廻しなどは、透谷の「空の空」を明らかに意識してのものであろう。このような「精神的な事業」が、民友社の一員とはいえ、「体験」を重視し「信條」を絶対視するメソヂスト愛山にとっても十分に把握されていたことに間違いはないかろう。

この論争を一層雑然とさせているのは「人生」とか「事業」と

か共通のことばを用いながらも、それぞれに盛り込んだ内容はかなりの距たりを有している点である。三浦が用いる「事業」と愛山が用いる「事業」とにさえ、同じメソヂストでありながらも距たりが有るのは先に述べた通りである。

三浦の「事業原論」はさらに続く。

此の内なる霊の人へ無限なり、真にパーソンを具して無限なり。即ち知る人の事業なるものは、吾に現世の細長き尺度を以て度るべきにあらざるを、故に哲人の事業は三重の天にまで達せんとて働くなり、何物の俗小敢て肉眼を以て事業を可否する、知らずヨナの飄へ、一夜に生へし時のみ事業ならず、一夜に亡びし時も亦事業なりしを。

三浦の「事業」観は確かに主体の側から発想され、そこに「生命」への通路を持っている。このような「事業」は透谷の言う「空の空なる事業」にも相通するように思われる。三浦として「高となる戦士」の役割は十分すぎるほど念頭に置かれていたのであろうし、そこから彼の「文学」への関心が発したのであろうことも了解してよい。

三浦は「青山評論」三八号(明26・7・20)の巻頭にも「情之人」を発表している。

情の人にあらざんば大事業を成す難し、心相照し、情相映するよりして人は動くものなり、真理夫れ自身真理に相違なし、然れども真理を具体せしめ、一の事実たらしめんには、熱情之に加味するにあらずんば不可なり。

と言ひ、また続けて言う。

人は一定の主義に立たざるべからず、これ人の生命なり、吾人の一挙一動は此生命より湧出せざるべからず、されど流るゝに当りて、情なる石に激することなくんば、焉んぞ彼の奔湍激流、汚を流し濁を洗ふて、滔々汨々たるを能くせんや、情の人にして始めて主義を活動せしむるを得べし。

三浦にとつて「情」とは「意志発動の導線」である、という位置づけがはつきりする。「生命」から発するひとつの（行ない）が「熱情」の助けによつて真理を具体化せしめる、「事実」たらしめる、それが「事業」に外ならない、とするのが三浦の論理構造の骨格であつたように思われる。こういった骨格を三浦自身観念的に十分把握しながら、彼の評論は成されたのであろうし、彼の《文学像》もこの枠内におさまるべきものであつたのだらう。

透谷も「熱意」(明26・6号)で「人性の中に若し『熱意』なる原素を取去らば、詩人といふ職業は今日の榮譽を荷ふこと能はざるべし。すべての情感の底に『熱意』あり。すべての事業の底に熱意あり、凡ての愛情の底に熱意あり。」と云つてゐる。特に「詩人」への関心を除けば三浦の言う「情」に類似してゐる。透谷における「熱意」(情熱)の位置づけは、「内部生命」との連関とも重なつてやや難解であるが、いま引用の箇所からは三浦との類似も指摘できるだらう。

ところが透谷の「熱意」は三浦の言うような一面的なものではなかつた。そこには簡単に「内部生命」と結びつけてしまへぬ何物があつた。「詩人といふ職業」が切つても切り離せぬものとして意識される要因が、他の一面にこそあつた。

「熱意」に伴つてゐるもうひとつの面とはなにか。透谷は次のように言う。

熱意は快樂と安逸とを放棄して苦痛に進入せしむることあり。

熱意は凡ての事業に結局を与ふる者なり。

熱意は不幸の友なり。(以上「熱意」前出)

「情」の如き、『欲』の如き、是等のものは常に裸体ならんことを慕ひて、縦に繫禁を脱せんことを願ふ。

熱意は人を誠実に駆り、誠実は往々にして人を破却に逐ふ、……(以上「桂川」を評して情死に及ぶ「文学界」明26・7)

情熱は執なり、故にあらず。凡そ情熱のあるところには必ず執るところあり、故に大なる詩人には必ず一種の信仰あり。(情熱・評 明26・9)

このように矢つぎばやに「熱意」の他の一面を強調していつた透谷の表現衝動とでもいうべきものは、あの美那との恋愛体験を通じて、自己の破滅を予感しつつ虚心に美那に語り続けた熱っぽさにどこか通じてゐる。「熱意」が透谷の内部においてどういう位置を占めるのか、また「内部生命」との連関等を問うことは確かに重要不可欠の問題ではあるが、いま私の関心をそそのめるのは、「内部生命」の展開にひとたび屈折した透谷が、「熱意」(情熱)の問題を真正面から論じ始めたことである。しかも、「熱意」のもうひとつの側面への言及にこそ彼は力を注いだかにみえる点である。

先に述べた「三浦泰一郎君」なる一文を草したのは、透谷にと

つては丁度そういう時期にあたる。

評論社に三浦を推薦したのが透谷であることは、三浦との初めての出会いを伝える巖本善治の回想にも語られている。透谷は自己の言論の最適の後継者として三浦を意識したのであろう。しかし一面で、それは読者への絶望と、そういう読者に迎え容れられるであろう三浦との訣別をも意識していたのではないか。二重の訣別——先に引いた透谷の持って回った言い方の裏には、更めて透谷の孤独の深さを伝えるものがある。読者は単なる後任推薦文としか読み取らなかったであろうが、透谷はこのような文章の端々にも自己の心中をふと漏らさずにはいられた。その時三浦の「事業原論」の末尾近くの次のような一節が透谷の脳裡に浮かばなかった筈はない。

事業を形体の繩にのみ縛ること勿れ、時勢の牢にのみ閉づること勿れ、現世の岸辺にのみ繋ぐこと勿れ。今や我国、空文字の中に没し、虚想像の界に沈み、厭世を高尚視し、神仙を理想に画き、時勢を知らず、人類を知らず、宇宙を知らざるが如きものあり。此の如くば遂に我国を木乃伊にせずんば止まず、又人間を尊貴になす所以にあらざるなり、吾人は断じて之を取らず、止むなくんば鋒を取て此思想を敵とすべきなり。而して我先輩、此に見るあり、日本の富強を策して所謂実業を勧む、吾人は之を敬受す。

透谷にとつては、あれほど三浦が強調した「心靈」とは、「生命」とは、「情」とは何であつたのかと問い返したかつたろう。

三浦はここでは、蘇峰らの経世的な視点とまったく同じ処からの発想に帰着してしまっている。明治二十六年という現状に彼が眼を注いだ時、「富強を策した」「実業」が全面に浮かび上つてきたのだろうか。それほどまでに明治二十六年という時点は、**富強——実業——市場**というような事柄が重く国民を覆っていた。山路愛山は「現代日本教会史論」の中でも「**実業熱の勃興と基督教**」について述べている。教会内部でも新神学の隆盛等によつて信仰を動揺させられた多くの人達が「**実業**」への道を歩み始めていた時期でもあつた。

三浦個人としても、メソヂストとしての自己の信念に基いての実業への関心と、文学への関心とを自己の中で統一させるべくひとつの志向が「**事業原論**」にはこめられていたと言える。

しかし、「**生命**」に主体の抛り所を求めていった、求めざるをえなかつた透谷と比べてみて、三浦の言う「**生命**」はその抛るべき主体がきわめて脆弱であつた。そのため「**生命**」からの発想はその展開にのみ力点が置かれて、あれだけ透谷が厳しく排斥し続けた**実業**とも容易に結びついていった。透谷の主体、透谷の「**生命**」は、**実業**と**厳然**と**峻別**しえた地点にこそ定立可能なものであつたことを思えば、三浦のそれはどうしてもメソヂストの範疇を逸脱することがありえなかつた。

しかしながら三浦自身、実際に**実業**に身を委ねていったわけではない。伝道活動に疑問を感じて**実業**に転向していった牧師達の居る中で、彼は牧師の道を選んで地道な人生を歩んでゆく。それは彼にとつては評論活動との訣別でもあり、彼自身口を噤まねばな

らぬ方向でもあった。そのときすでに透谷は亡く、『青山評論』に記した最後の文章があとに引く北村透谷を悼む文章として残った。人生相渉論争における「事業原論」の地位はこれまでまったく見落とされてきているし、わずかに透谷全集の解説で勝本氏が触れ、明治文学全集「山路愛山集」の解説で大久保利謙氏が触れられるぐらいで、その内容に至ってはいまだに誰からも言及されてはいない。しかし、いま三浦の評論活動をトータルに眺め、そこから「事業原論」を検討してみても、人生相渉論争の中にひとつの位置を要求することぐらいはできるのではないか、私のこの論への執着もここに根ざしている。

IV

三浦泰一郎の『青山評論』編輯人時期はどうであったのか——。木田八十吉が東京を離れるにあたって、その後任に推されたのが四二号（明26・11・30）からで、さっそく誌面の改革を目指して社告に次のように言う。

（進歩は吾人の主義なり）本誌ハ將に一大改良をなさんとす、然り明年一月を期して新しき思想と、新しき生命と、新しき気分を以て、而して新しき衣を着て、

実際は二月に発刊された新年号の四四号（明27・2・21）は、『須論』以来初めて巻末付録を設け創作特集欄を組んでいる。三浦は最後に創作「尼將軍政子」を発表している。創作というにはあまりにも解説的、評論的であるけれども、編輯人としての三浦の張り切りようを察知するには十分である。この他巻頭評論にも

筆を染めた。⁽¹⁶⁾

ところが三浦の張り切りも長くは続かなかつた。『青山評論』四九号（明27・9）は突然の編輯人交代、編輯スタッフの総入れ替えを報じている。その理由は詳かたなく三浦の所遇もはっきりしない。ただこの変更が急であつたことは社告で分るし、もともと七月に刊行すべきものが二ヶ月遅延している。

四九号以後の『青山評論』誌上には三浦の名はまったく登場しない。私の調べた限り、評論文等は勿論、消息欄にも見えない。どこかの牧師として赴任したのであろうか。同じ編輯者であつた舟橋雄らの消息が詳しく報じられている中でなぜ三浦の消息が分らないのか。そこに三浦の『青山評論』退社が決してスムーズではなかつたことが推測される。

その根拠と考えられるものに、編輯者でありながらも三浦の先輩にあたる岡田哲蔵（号鉄象子）の次の発言が参考になる。四七号（明27・5・22）に「雑感」と題して、

吾党の機関雑誌——其紙面をして純聖ならしむべし、活氣をして溢れしむべし、同志の学生自身の手に成れる精確なる、学説論議に充たしむべし、軟文学、俗文学の蠱毒は甚だ大なり、之を排除して容るゝ勿れ。（傍点引用者）

とある。編輯部内での内紛がこういう形で表われたのではないかと思われるが、文学味を大いに盛り込んでいった三浦の方針に対する反発には違いない。岡田にとつては「軟文学俗文学」に傾斜してゆく『青山評論』にしのびなくて、純学術雑誌として出発した『須論』の原点に戻れ、と言いかつたのだらう。

そんな中で三浦は、同誌四八号（明27・6・30）の「天地悠悠」欄に透谷追悼の文を書く。当時の文壇で、透谷はまだまだ新進の批評家にすぎなかったであろうが、同じキリスト教に関与した者とはいえ、他教派の、しかもキリスト者としては許されざる自尽し果てた者を、異例なほど大々的に取り上げたことは、三浦への風当たりを一層強くしたのであろう。今までまったく気付かれなかつたこの追悼文は、同時代人の透谷へのひとつの理解を示している貴重である。透谷が『青山評論』に筆を執るうとしていたこと、三浦に一書を草したこと、すでに病床で伝道の意をほのめかしていたことなど、興味ある事実を伝えてくれる。

一応、その全文を引いておく。

故北村透谷君

流水生

我が青山評論は未だ君の文章を有せざりき、然れども確かに同情を與へし友の一人なりき。昨夏一文を寄せんことを約し、未だ成らずして病辱に就かる、新春書を以て病息るの日、約を果さんと云ふ、而して君終に亡し、焉んぞ多少の感なきを得んや。

當今の文界、人才少なしとせず、只だ深く人生の問題に留心せし君の如きは多からざる也。「内部生命論」「人生の意義」等數篇の論文は、聊か以て君の着眼點を窺ふに足らん、更に「楚囚の詩」及其他の韻文は皆盡く君の眞面目なるを知る可き也。此を以て君又直接傳道に意あり、病中の如きは既に決心せしと聞く、昨夏君此寓を訪ふや願きて曰はく傳道者となる君の志願るよしと、決して好言のみよ非ざりし也。特に君は平和主義に熱心よして、雜誌

「平和」の如き君の盡力少からずと云ふ。かゝる覺悟を以て文界に起つ、僕等竊かよ以て心に頼む所ありき、而して君終に亡し、焉んぞ多少の感なきを得んや。

文才の君に至ては今豈よ言ふを待たんや。「楚囚の詩」「蓬萊の曲」の讀者は皆其著者より後來の大著作を望みしなり、君も會すれば必ずドラマを云ふ、如今演劇の説紛々たる時、心特に高潔の君を慕はずんばあらず、天才は天才との金言をフアクトせしと何等の恨ぞや。

君病んで「評論」寂、「文學界」又論客を失ふ、文壇一特色を失へるの感あり、世は君の癒ゆるを待て忍べり。而して君終に亡し、今後果して如何ぞや。

特よ君の人品よ至ては誰れか慕はざるものあらん。僕只だ一面識の交、而して實に同情と誠實とよ慕するものあり、宜べある哉君の友人皆嘖々として其徳を慕ふこと、僕只だ君の流韻纏綿たる高風を思はず、君の至誠人に推し所謂城府を設けざる赤心に服す、文士往々にして世道に益なし、而して君終に亡し、嗚呼聊か自ら奮ふ所あらんとす。

君忽然として逝く、我れ今特に君の未亡人と遺子を思ふよ堪へず、悲痛を以て送る可けんや、聊が流風を吾黨に傳ふれば足るのみ。

一小冊子「エマルソン」空しく遺著とかれり、無名の草は天地の心を教ゆ、此小冊子豈に君の天才と所志を語らざらんや。

三浦の透谷への関心が、「深く人生の問題に留心せし」点に求

められていること、「僕只だ君の流韻纏綿たる高風を思はず、君の至誠人に推し所謂城府を設けざる赤心に服す」という点などにはっきりと語られている。どちらかというところ『文学界』同人達の多くが透谷の「流韻纏綿たる高風」を慕う傾向があったのと比べてみる時、際立った対照を示していると言える。

『青山評論』の四九号からの編輯人は、三浦に代わって工藤陽太郎(号紫峰生・紫明暗)が担当している。それまで工藤は一編輯員であった。四九号からすぐに「天地悠悠」欄が消え、文学臭が除去されたわけではない。雑誌評や詩歌等の抄訳が掲載されたりはして、編輯方針の急転換がなされているわけではない。が、編輯部内で混乱が続いていたことは社告から窺い知れる。確実に学術雑誌への回帰が始まっていた、次第に無味乾燥なものになり果ててゆくのは否めないような気がする。

『青山評論』は明治三十年十二月の八三号まで刊行されて中絶するが、全体を通してひとつの教派、ひとつの学園の機関誌であったという制約から免れることができなかった。三浦の編輯人時代がユニークなのは、そういう制約からわずかに逸脱しかけたところにある。それは彼の文学への関心に端を発していたと言っても過言ではない。が、『青山評論』の性格がそういう逸脱を許しはしなかった。その時三浦は無言で同誌を去るしかなかった。その無言はそのまま三浦自身の無言を強い、また当代文学状況との絶縁をも強いた。

超宗派性が強かったといわれる『聖書之友雑誌』さえ、透谷の

編輯責任を解かねばならぬ状況であってみれば、メソヂスト対象の『青山評論』に読者の眼からみて軟文学盛況の兆がみえてきたことは、やはり好もしくなかったであろう。

昭和十九年に刊行された「恩寵の流」には五十の説教が収められているが、そのなかでわずかに一箇所透谷の作品に言及して教えを述べている。それは「内部生命論」でも「漫罵」でもない、「富嶽の詩神を思ふ」であったところに、明らかに三浦の転身を察知することができる。昭和十年代の透谷のもてはやされ方が、そのまま三浦を把えているのではないか。

三浦の考えが時勢と伝道への誠意との間隙で大いに動揺していたことは「恩寵の流」の後書き等にも窺われるところである。彼が巻末に付した「若き頃の思い出」への回帰は、動揺の中から生まれだひとつのセンチメンタリズムであったのか、はたまた本文をカムフラージュするためのものであったのか。

勝本清一郎氏の解題(『透谷全集』二巻・P.47)によれば、三浦が空爆の犠牲になるのは昭和二十年五月十九日、日本基督教団浜松教会でのことで、「恩寵の流」を刊行してまる一年後のことであった。三浦は牧師としてではなく、隠居して浜松に住んでいたという。透谷逝って五十一年目をむかえた直後にあたる。

戦後になって、昭和十年代のいまわしい透谷のイメージは完全に克服されたといえる。

無名の若輩でしかも僅か一年余しか評論活動を続けなかった三浦が、いわゆる〈近代文学史〉の中で黙殺されるのはあるいは仕

方ないこととしても、彼が唯一持ち得た透谷との絆さえ断たれては、不本意の上ないであろう。いま更めて、この牧師の「青春の譜」を発掘することは、まったく徒勞に終わつたらうか——。

註

(1) 後の青山学院長本多庸一が、仙台教会から青山に赴任してくるのが明20・9であり、一年後の明21・9渡米の途につくが、この一年間に教えたのが、岩村透、笠原民次郎、木田八十吉、間島弟彦、生江孝之、岡田哲蔵らであった。(岡田哲蔵著「本多庸一伝」)

(2) 「青山学院五十年史」p.360~361 文芸(神田恆夫)

(3) 「雑報欄」に「同盟文学会」の記事がでており、三月十五日午後七時から十時まで、「雨天なりしにも係はらず、内外人の来賓は堂に満ち頗る盛会」であつた旨がみえる。

(4) 前出(2)参照

(5) 「女学雑誌」柳田泉(『文学』一九五五・一)

(6) 二一号「雑報欄」○読売新聞元旦付録筆はしめ 春月生
○井筒女之助 ちぬの浦浪六著 企」が取り上げられ、二二二号(明25・2・16)「雑報欄」では「国民之友新年付録 すみれ・第一麗水生の巨人石 第二思軒居士の懐旧 第三篁村氏の霜柱」が批評の対象としてあげられている。

(7) 「青山評論」二二二号「雑報欄」に、一月三十一日銀座教会で、「詩人ダビデ」と題して講演したことが記されているところを見ると、その際原稿でもあろうか。

(8) 「大石良雄」は、三一、三二号に分載された。『文学界』二二号(明26・2・28)「雑報欄」は多くの新刊雑誌を取り上げたひとつに「青山評論」三二号を上げ「関東に立て同志社文学と意気同ふするものは青山評論なり、而かも悔り難き鋭鋒を振りひらめかして往々彼れを逐ひまくるの勢あり」と言い、「大石良雄最も評眼緻に入る」と言う。

また、ちなみに『三續』二二号(明26・4・30)は「青山評論」三五号をとりあげ「基督教主義の学校より刊行する雑誌の王なり。先輩の詩文少くして青年諸氏の手になりしのみが、特有の長所なり評者は狼りに大家の寄稿を乞ひて売ることを旨する(を)好まず。好雑誌、好雑誌! 進め進め!」と賞讃している。

(9) 「青山評論」三九号(明26・8・20)「雑報欄」は、三浦泰一郎、水上梅彦(論記者)のふたりの護教入社、三浦の評論入社を報じている。また神学部本年卒業生の任地を掲げている。

(11) 雑誌評の中で、わずかではあるが『文学界』五号がとり上げられている。最後の「み、た」の名が記されているが、「みうらたいいちろう」の略記である。このころ多く散見する。

(12) 「熱意を「内部生命の属性」としてとらえ、現実の中に価値を創造してゆくエネルギーと考えた安住誠悦氏(透谷試論「文」)に対して、平岡敏夫氏は「統北村透谷研究」p.160で疑問を述べている。

(13) 三浦は、明35年小冊子「はしかげ」を刊行し、巖本善治が

跋を寄せている。その中で三浦との初めての出会いを次のように記している。

「余の初めて君を識れるは、君の青山評論に筆を揮ひたる時にあり、其事業原論の如き、所謂文学と人生との相関論につきて温健の論評を試みたるものなりき、当時余、故北村透谷君と『評論』を発売して、社会百般の事件を論評せりしが、一日透谷君、君と相携へて、余を中六番地の餐舎に訪ひ、評論社に入て助けんことを語せられしを聞く、此れ君と初めて相見たる時なり。」

(14) 「基督教評論」岩波文庫本・p.112参照

(15) 金森通倫や横井時雄が代表だろう。勿論そこには新神学の問題、儒教との折衷等も絡んでいたのだが……

(16) 四三号「年の暮につひて」・四四号「新希望」・文学者・婦人と文学他(ただし無署名だが三浦が)・四六号「音楽につきて」・四八号「伝道論」(無署名だが三浦が)

(17) もとより校内外の諸事情も考えられる。六月二十日大きな地震が、ガウチャ館を壊し、学校にも多大な被害を与えた。七月東京英和学校から青山学院と改称。また、学年末であるので、三浦は一年の契約を終えたとも考えられる。

(18) 「透谷全集」二巻、勝本清一郎氏の解題(p.447)によれば、三浦は透谷の亡くなった年(つまりこの年)、横浜戸部教会の牧師になっている。

(19) 透谷が『聖書之友雑誌』編輯に関わったのは、六四号から七〇号迄で、六八号には三浦の「基督教信徒の活動」が掲載され

ている。透谷の要請原稿であらうという。(勝本氏解題、「透谷全集」三巻、p.682、683)
(20) 三浦は、「富嶽の詩神を思ふ」に触れたあとで、透谷に言及して次のように言う。

「彼は歴史の頁の時潮と共に流れ行くを見た。蓋世の英雄も墳墓の前に力無きを嘆いた。花月に弄ばれ運命にさいなまれ、寤寐孰れが真ぞと惑ふた。所謂憂国慷慨の士も、亦自ら期せざる渦流に捲き去られるを嘲つた。かくて朽ちざるものいづくにかと叫び、其答を聞かんために、過去の半生を逍遙黙思に費やしたと告白する。」

(21) 三浦は、あとがきで「信仰の中心は変らないにしても、時勢に由て説き行くこととて、校正しつつ不満足さへ感」じる旨を述べながらも、この疑問は進展することもなく、「此決戦下にと思ふと、畏れ多くも皇恩の忝けなき、我が将兵が捨身奮戦の結果と、此祖国に在るありがたさを沁々感じ」る所に流し込んでしまっている。

〔付記〕

拙稿を書きおえてまもなく、浜松市在住の三浦泰一郎養女藤井静枝氏から丁重なるお手紙を戴いた。ここに三浦泰一郎の略年譜を添えることができたのはひとえに藤井氏のお蔭である。

○三浦泰一郎略年譜

明6・6・21 弘前藩士三浦清一・妻ぎんの長男として弘前に生まれる。父清一は祐筆と代官を勤めた。六才の時藩の学校に入学、中学の時友人に誘われて教会の門をくぐる。受洗は

一九才の時。

中学時代から新聞記者志望、二高文科に入学。途中、明23・3父の死で二高中退、弘前に帰省。

明23・9 東京英和学校神学部(青山神学校)入学。

明25・1 「須論」を「青山評論」と改題。「クラウドを読む」発表。

明26・6 「事業原論」発表。同・7同校神学部卒業。尚一年間学校に残り、「青山評論」「護教」に関与。同じころ透谷の紹介で「評論」にも関与。同・11「青山評論」編輯人となる。

この年、横浜の生糸貿易商高木三郎の妻須磨子の妹、高島貞と結婚。姉須磨子は、敬実なクリスチャンで横浜戸部教会の大きな支持者であった。

明27・5・16 透谷縊死。同・6「青山評論」四八号に透谷を悼む文を書く。この号で、編集人をおりる。同・7教職試験となる。同・9日本メソヂスト戸部教会(横浜)に任命を受ける。

明28・7 日本メソヂスト四谷教会(東京)に任命を受ける。

明31・9 正員となる。ミッションスクール清流女学校(名古屋)教頭として赴任。

明35・ 小冊子「ほしかげ」刊行、内容は、新体詩、会話体唱歌、散文対話等から成っている。明41増補再版が発行されている。

明38・4 日本メソヂスト浅草教会(東京)に任命を受ける。

明42・4 日本メソヂスト三田教会(東京)に任命を受ける。

明45・7 日本メソヂスト米沢教会(山形県)に任命を受ける。

大15・4 日本メソヂスト中野教会(東京)に任命を受ける。

昭3・3 日本メソヂスト鶴町教会(大阪)に任命を受ける。

昭8・4 日本メソヂスト神奈川中央教会(横浜)に任命を受ける。

昭14・4 日本メソヂスト工藤記念桜新町教会(東京・世田谷)に任命を受ける。

昭16・3 隠退、その後は文書伝道に力を注ぐ。雑誌「牧人」

による伝道。(昭和11年より継続)、やがて、この「牧人」に掲載されたものを中心に、昭19・5「恩寵の流」刊行。当局の弾圧により、数ヶ所削除されて刊行されたものの、版を重ねることできず、やむなく一版だけで終わる。(五〇〇部できたかどうか疑問)

昭19・9 老人児童の強制疎開により、東京から浜松へ移転。

昭20・5・19 空爆により死去。文書伝道は、物資不足と、軍の圧力とによって思うようにできなくなり、戦後に必らず思想の混乱する時代がくる、その時こそ自分の使命のときだ、と言って、特に身体に気を配って生活していたという。